

* 長唄「風流船揃」考——その曲名と主題

細谷 朋子**

はじめに

本稿は、長唄「風流船揃」(安政三年(一八五八)二月初演、二代目杵屋勝三郎作曲、織月亭作詞)の主題について検討を試みるものである。

近世芸能における「隅田川」という場所の重要性は、既に先学の指摘するところである^一。そのうちもつとも代表的な作品群は、謡曲「隅田川」に描かれる梅若伝説を原拠とする諸作品である。梅若伝説に基づく作品は、浄瑠璃・歌舞伎では隅田川物と総称される一ジャンルを形成し、三味線音曲の分野にも、一中節「峰雲賤機帯」(宝暦元年(一七五一)、河東節「常陸帯花欄」(一八世紀後半)、長唄「八重霞賤機帯」(通称「賤機帯」、文政十一年(一八二八))等の曲が残る。

また、江戸という都市の発達および文化的成熟とともに隅田川沿岸に遊興地がおこるにつれて、四季ごとの風情を楽しむ船遊びの場として、あるいは吉原・柳橋・向島への道程、恋情の舞台としても、隅田川は邦楽詞章に頻繁に登場するようになった。長唄で言えば「岸の柳」「都鳥」などが代表的作品である。

さらに時代が下ると、隅田川および隅田川から眺める景物は、江戸に生きる人々の帰属意識にも結びつく。江戸という都市におい

て発展した長唄にとって、隅田川は欠くべからざる存在であった。長唄「風流船揃」も、隅田川を唄った作品である。本曲が先に挙げた長唄諸曲と異なるのは、物語の舞台や四季・恋情を描くための背景として隅田川を利用するのではなく、源流や河口(「海」といった遠景、行き交う種々の船、船遊びの詳細な様子など、隅田川そのものを描いている点である。

長唄の詞章は、その多くが先に成立した文芸や歌謡に拠ってなった文芸作品である^二。本曲「風流船揃」もその例に漏れず、特に歌の後半において、同時代の俗謡や遊戯の文句を、場面に即してリアリステイックに取り入れている。これまでの研究では、主にこの歌後半の詞章の持つ臨場感が注目され、

江戸情調のゆたかな行事を描いた文化資料の一つとして風俗史的にも価値のある作品といえましょう(『長唄名曲要説』)

江戸庶民の遊楽境として船遊びの模様が、特に二上り以後の後半に面白く写されていますので、江戸の風俗が表されている点でも大変価値のある作品と申せましょう(『日本舞踊全集』)と評価されてきた^四。

たしかに、本曲からは江戸の船遊び——月や花を楽しむ風雅な遊びのさまでなく、酔漢たちの騒々しさまでが実によく伝わり、その意味で「文化資料」としての側面も認められる。だが、船遊び

云』の注記存するに拠り推定」とされるのに従う。

元 明月記翌日の条に「中将『雅経』(略)又語云、昨日御鞠之間、宗長朝臣承上鞠事、其作法惣非所存、尤以為寄(略)」により推定。

三 武藤氏「御遊抄、拍子・笙のあと、『自余略之』。『雅経卿記云』の注記存するに拠り推定」とされるのに従う。

三 明日香井集では年次が記されず、建保三年の月卿雲客妬歌合の次に配されている。しかし、一二四〇歌は、武藤氏が指摘されるとおり新千載集に入集しており(巻一、春上、九)、その詞書は「建保三年内裏詩歌合に、野外霞」であるが、建保三年には内裏詩歌合の催行は確認されず、題は建保二年二月三日の内裏詩歌合と一致しているため、この時のものと考えられる。また、夫木抄一四七〇の詞書では「建仁二年内裏詩歌合」となっているが、建仁二年に内裏詩歌合が催行されたことは確認できず、題が「河上花」なので、やはりこの時の作であろう。

三 岩橋氏「熊野懷紙について」(『書道全集』第一八巻、平凡社、一九六六年)、田村氏「後鳥羽院熊野御幸当座歌会本文集成」(『古典論叢』第二六号、一九九七年一〇月)。

三 武藤氏は「年月無記ながら[1399—1400]もあるいはこのときの作か(詞書により推定)」とされる。

四 注七に記した通り、明日香井集下巻部類歌中の祝の歌は、詠作順に配されていると考えられる。この贈答の前の贈答が建保四年一月一日のものと思われるので、それ以降雅経が没する承久三年三月一日までに詠まれたことになるが、一六三九歌に「としのうちに」と見えるので、下限は承久二年末と考えられる。

五 明日香井集には、この時の作として異なる二首が収められている。このうち、歌会の本文と一致するのは一六七二歌で(第四句に異同あり)、続古今集に入集している(巻二〇、賀、一八七七)ほか、万代集にも見られる(三七七七)。雅経は複数の歌を詠んでおり、一二八四歌は不採用としたものが家集に混入したものと想像される。一六七二歌は、中殿御会歌が家集に存しないことに気づいた誰かがここに置いたのではないだろうか。

六 『日本古典文学影印叢刊15 新撰六帖 御室五十首 光台院五十首』の解説、『群書解題』、『和歌文学辞典』(桜楓社、一九八二年)、『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八四年)、『和歌文学大辞典』(明治書院、一九八六年)、『新編国歌大観』解題による。

* A Chronology of Asukai Masatsune

* Miki Inaba 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科

キーワード 飛鳥井雅経 『明日香井集』 年譜

(Department of Culture and Communication)

う命じられており、有家とともに一〇日に詠進していることから、雅経も同じ頃に詠進したと考えられる。

二 雅経女の夫について、明日香井集の詞書に見える「中将忠嗣」とすると、大炊御門師経（安元三年「一一七五」―正嘉三年

「一二五九」）息忠嗣（尊卑分脈では左中将正四位とする）の可能性が考えられるか。ただし、系図纂要では「忠継卿室」、尊卑分脈では「忠継朝臣室」とする。これに従うと、中川博夫氏「藤原教定について（上）―関東伺候の廷臣歌人達（二）―」（『中世文学研究』中四国中世文学研究会編、第一六号、一九九〇年八月）に指摘される通り、「参議五辻忠継」の可能性が高いと思われる。

三 詞書は「五月五日、本院へまゐりて、女房越前をたづねて対面して、ややひさしくありていでけるに、忠信卿春宮権亮の扇をとりて硯をめしてたびたれば、かきつけ侍る」。「本院」は斎院の御所と考えられる。「越前」は初め後鳥羽院生母七条院殖子に仕え、その後後鳥羽院皇女嘉陽門院に仕えた人物なので、この贈答が行われたのは嘉陽門院が斎院であった時と考えられる。嘉陽門院は元久元年六月に卜定され、建暦二年九月に病のため退下している。初めの三年は初斎院で潔斎するため、詞書に見える五月五日は承元二年から建暦二年の間と考えられる。

三 寺島恒世氏は「河崎泉亭において催された歌会か。」とされる（和歌文学大系『後鳥羽院御集』）。

四 呼称は辻勝美氏による（「承元三年長尾社歌合の出詠歌人について」『語文』第九九輯、一九九七年十二月）。

五 系図纂要に「承元四年生」と記されている（中川博夫氏注「

一論文に指摘）こと、雅経筆『古今集』の教定識語に、一二歳の時に父雅経と死別したと記されている（久曾神氏注一著書五ページ・小松氏注七著書三六〇ページ・中川氏注一一論文に指摘）ことによる。

六 久曾神氏注一著書一八ページに指摘するように、吾妻鏡一〇月一三日条に「鴨氏人菊大夫長明入道。法名。源胤。依雅経朝臣之挙。此間下向。奉調將軍家。及度々云々。」と見え、また、菟玖波集（巻一七、羈旅、一七〇六）に「参議雅経と伴ひて東へまかりけるに、宇津山を越え侍るとて楓を折りて」という詞書で、長明と雅経の連歌が見えることによる。ただし、久曾神氏は「九月十日頃京都を立ち、下旬鎌倉についた」と推定されるが、九月二十四日には雅経は京都にいたことが知られる。

なお、武藤氏は「九月に旅路にあつた」可能性ある年、ほかにも九年ほどあり。九月二十四日・十月二十二日在京の記事あればなほ寛束ならん。この秋下向の説を採らず。」とされるが、房野水絵氏が「秘曲づくし事件をめぐる その二」（『鴨長明の研究』二、一九七六年六月）において考証された通り、この間に京都と鎌倉を往復することは計算上可能である。雅経自身の経歴では、建久八年二月四日に鎌倉を立ち、二月一九日に京都に到着したことが知られる。

七 親成は、久保田淳氏が述べるとおり（『藤原家隆集とその研究』三弥井書店、一九六八年、四八五ページ）、祝部親成で、明月記寛喜二年（一二三〇）一〇月二日条によると、その前々日に八九歳で没しており、七十賀が行われたのは、建暦元年かと思われる。

八 武藤氏「御遊抄、拍子・笙のあと、『自余略之』。『雅経卿記

羽院の催した当座歌会の折のものであったと推定できるよう思う。」田村柳菴氏『後鳥羽院とその周辺』（一九九八年、笠間書院）一五ページ。

四 武藤氏は、明日香井集一五八四～一五八六を、歌題が一致することからこの時の作と推定されている。

五 源家長日記では二首ずつの贈答を載せる。

「事果てて、暁がたにおのおのまかり出づ。置かれたる法服・杖など、次の日の朝に送り遣はす。御使、秀能なり。御返り、かく奏せられて侍りし。（後成歌二首略）」

「返しせよ」と仰せられしかば、（歌二首略）」

これについて、『中世^{日記}文学全評釈集成』が、『源家長日記』では、翌日に俊成が詠んでよこした感謝の歌に対する返歌が、家長の作であるかのごとき形となっているが、『賜釈阿九十賀記』には雅経が詠じたものであることが明記されており、「（七三ページ）とするのに従い、雅経歌と解しておく。

六 『源家長日記全註解』（石田吉貞氏・佐津川修二氏、一九六八年、有精堂）などが指摘するように、明月記元久元年七月一日始被出和歌所」が、雅経が献上した木切れで作ったものではないかと考えられるので、献上したのはこれ以前となる。

上限は、「橋柱の文台を手に入れば直ちに使用するのが実情であると思われるから、元久元年七月十一日より前の熊野御幸で、建仁三年の三月か七月のどちらかであったのではないかとと思われる。」（『源家長日記全註解』、一一六ページ）とされるのに従う。

七 明日香井集下巻部類歌中の祝の歌（一六二六～一六三九）は、

定家との贈答七組から成るが、冒頭の一組以外は、雅経また

は定家、あるいはそれぞれの子息にまつわる内容である。その六組中、詠歌年次の知られる四組はいずれも詠作順に配されている。このことから、年次の明らかでない教雅に配する

二組（一六三〇と一六三一、一六三八と一六三九）も詠作順に配されている可能性が高いと思われる。このうちの前者は、教雅を「ありきぞめ（行始ともいう）」で定家邸に遣わした際の贈答である。一六二八と一六二九が建永元年正月一七日の贈答、一六三二と一六三三が建暦元年九月八日の贈答で、一六三〇と一六三一はこの間に詠まれたと考えられる。ありき

ぞめは生後五〇日以内に行われるので、教雅出生の上限は元久二年十一月、下限は次男教定が承元四年に生まれており（後述）、二人は同母なので、承元三年と考えられる。また、教雅は明月記寛喜二年（一二三〇）三月一六日条により、同月一四日に没したことが知られるので、享年は、二二歳から二六歳と推定される。なお、小松茂美氏は「教定の兄教雅を、二

歳と推定される。三歳の年長と想定すれば、承元元年（二年）へ一二〇七～一〇八ころの出生と考えることができる。」（『古筆学大成』第三巻、一九八九年、講談社、三六〇ページ）とされる。

注七参照。

九 詞書に見える兼季は藤原親忠男。中将であったのは、建永元年正月一三日（建保六年正月五日）。信能は藤原保能男。少将であったのは、元久二年四月二〇日（建暦元年正月一八日）。従って、両方を満たす八月一〇日は建永元年から承元四年の間となる。

八

九

二〇

明月記六月七日条によると、定家は一〇日までに詠進するよ

承久元年（一二一九 五〇歳）

六月 この頃から、雅経女、中将忠嗣室（一三歳）患う。（明日香井集一五九八詞書）

七月七日 前項と関連して詠歌。（明日香井集一五九八）

七月九日 雅経女没。この頃、多くの歌を詠む。（明日香井集一五九八）

八月二七日～九月二二日 仏事等に関連して詠歌。（明日香井集一六一九～一六二二）

九月二七日 中将忠嗣と贈答。（明日香井集一六二二～一六二五）

五）

承久二年（一二二〇 五一歳）

二月一三日 内裏御会（明日香井集一二八七・一二八八）「春山月」「野外柳」の二題。順徳院宸記によると、所労のため出詠のみ。

詠のみ。

七月一七日 影供三首を詠む。（明日香井集一三四二・一三七五・一四四六）「古径萩」「暁初雁」「寄萩恋」の三題。

八月一五日 内裏御会（明日香井集一二八九～一二九二）「待月」「見月」「惜月」の三題。順徳院宸記によると、所労のため出詠のみ。

二月一八日 任参議。（尊卑分脈・公卿補任）

承久三年（一二二一 五二歳）

正月一三日 兼美作権守。（尊卑分脈・公卿補任）

二月二二日 内裏御会（明日香井集一二九二・一二九三）「春

風」「春雨」の二題。明日香井集には日付が記されていない。光経集は二一日とするが、順徳院宸記による。順徳院宸記によると、講師を務めた。

三月七日 春日社歌合（明日香井集一二九四～一二九六）順徳天皇主催。「野花」「海霞」「述懐」の三題。

三月一日 死去。（尊卑分脈・公卿補任）

注

一 「広元女の腹の教雅の年齢不明であるが、建久末年あたりに出生してゐたやうであるから、建久六七年頃結婚したとして差支なからうと思ふ」久曾神昇氏『崇徳天皇御本古今和歌集』（一九四〇年、文明社）一四ページ。

二 「そのころは九月に侍りしに、九日、御坪なる心もとなき菊を折らせ給ひて、結び付けて少将雅経に給はす。

御返事

長月や今日をや露も待ちつらむ置けばしほる白菊の花

かやうに侍りけるとぞ、後に聞き侍りし。」（源家長日記八段、二位殿のお産）

この贈答について、『中世日記文学全評釈集成』では「略」待ち遠しい気持を詠んだ院の歌に対し、雅経を介してその歌を受け取った重子が、院の愛情を露に比喻し、慈愛の言葉を受けて感涙にむせぶ我が身を白菊に見立てて応えたものである。」（二三ページ）とされるが、この文脈では雅経が詠んだと解する方が自然であろう。

三 「いわゆる『熊野類懷紙』は、正治二年夏から秋にかけて後鳥

大観五卷二二三 兵衛内侍と番えられ、四勝一負五持。

八月廿日 熊野詣路次当座和歌（明日香井集一二五七～一二六

一）明日香井集では九月廿日となっているが、岩橋小彌太氏・田村柳菴氏が述べるとおり、後鳥羽院御集に記載されているように八月が正しい（注二二）。題は、明日香井集では「山花」「山夕」「山月」「山暁」「山旅」であるが、後鳥羽院御集では「春山花」「夏山夕」「秋山月」「冬山暁」で五首目は題を欠いている。

一〇月一日 嵯峨殿庚申当座歌会（明日香井集一二六二）題は「山花落葉」（注二三）。

一〇月「建保四年十月歌合し侍りけるに、初冬」（明日香井集一三九二）

十一月一日 内裏御会（明日香井集一二六三～一二六五）「寒山月」「遠村雪」「寄葦恋」の三題。明月記同日条によると、雅経は講師を務めた。

十二月二日 父頼経卒。（尊卑分脈）

十二月八日 中殿御会で筆策を所作。（御遊抄）

十二月十四日 定家が正三位に叙せられ贈答。（明日香井集一六三六・一六三七、拾遺愚草二五二四・二五二五）

十二月十四日以降承久二年末までの間か 教雅が少将に任じられ、定家と贈答。（明日香井集一六三八・一六三九、拾遺愚草二五二八・二五二九）（注二四）

十二月「服解（父）」。（公卿補任）

建保五年（一二一七 四八歳）

四月一四日 院庚申御会（明日香井集一二六六～一二七〇）

「春夜」「夏暁」「秋朝」「冬夕」「久恋」の五題。明月記同日条によると、出座はしなかった。

八月十五日 右大將家歌合（明日香井集なし、大観一〇卷六六）通光主催。秀能と番えられ、一勝一持。

八月二十七日 復任。（公卿補任）

九月 右大臣家歌合（明日香井集一三七一～一三七六、大観五卷二二四） 道家主催。道家・定家らと番えられ、三勝一負二持。

十一月四日 冬題歌合（明日香井集一二七七～一二八三、大観五卷二二五） 順徳天皇内裏で行われた。道家と番えられ、二勝二負三持。

建保六年（一二一八 四九歳）

正月五日 叙従三位。（公卿補任）

八月二日 翌日の中殿御会出詠歌を見て、定家が雅経歌を評價。（明月記）

八月十三日 中殿御会（明日香井集一二八四・一六七二、大観一〇卷一三六）（注二五） また、この時筆策を所作。（明月記・御遊抄）

九月一三日 内裏で歌会が行われたが、中殿御会以降所労が増加したため不参。（順徳院宸記）

一〇月二日 歌会（明日香井集一二八五・一二八六）「社頭暁月」「禁中翫月」の二題。ほかにこの題の歌は見いだせず、詳細不明。

この年、承久二年 道助法親王家五十首（明日香井集九一九～九六八）建保六年頃下命、承久二年までに詠進か（注二六）。

七勝一負七持。

八月二九日 歌合で、雅経が歌を読み上げる。(明月記) 「去

十六日」の「仙洞秋十首歌合」を写して実朝に送る。(吾妻鏡) 日付と歌数とが合致せず、一五日のものか、一六日のものか不明。

九月三日 当座御会(明日香井集一二三〇・一二三二) 「曉山」

「夜恋」の二題。

九月一四日 院御会(明日香井集一二三三) 題は「月契多秋」。

九月二九日 月卿雲客歌合(明日香井集一二三三・一二三五)

「野径月」「寄雲恋」「霧中雁」の三題。紫禁集・和歌合略目録では九月二五日とする。

九月三〇日 月卿雲客歌合(明日香井集一二三六・一二三八、大観五卷二二二) 順徳天皇と番えられ、三番とも負けている。

一二月一三日 大炊御門殿が完成し、後鳥羽院が修明門院とともに移御、雅経は修明門院に供奉。(大日本古記録所引伏見宮御記録)

一二月一四日 弓場始で射手を務める。(明月記)

一二月一六日 臨時御会で筆築を所作。(御遊抄)

建保三年(一二二五 四六歳)

正月三日 臨時御会で筆築を所作。(御遊抄)

正月一四日 賀茂社に詣で詠歌。(明日香井集一六四三)

六月二日 院四十五番歌合(明日香井集二一九〇・二一九四、

『大観』五卷二二二) 源通光と番えられ、一勝四持。吾妻鏡同年七月六日の条により、実朝に贈られたことが知られる。

六月一日 月卿雲客歌合(明日香井集一二三三九、大観一〇

卷六二) 明日香井集には「野外夏草」一首のみ収める。判詞はない。

六月一八日 内裏歌合(明日香井集一二四一・一二四六) 「水

辺柳」「江上霞」「朝落花」「夜帰雁」「山晚風」「野曉月」の六題。明日香井集では「六月日」となっているが、紫禁集により一八日に催行されたことがわかる。

八月二一日 内裏連歌・狂歌合に参加。(明月記)

九月二九日 使として鎌倉へ下るにあたり、定家と贈答。(明日香井集一四八七・一四八八) また、「暮秋餞別」題で詠歌。

(明日香井集一四八九)

一〇月一日 賀茂社に三首奉納。(明日香井集一四九〇) この後、鎌倉へ出立したか。明日香井集一四九一・一五三五は道中の詠歌。

一〇月中旬・下旬 鎌倉に到着し、順徳天皇に歌を贈る。(明日香井集一五三六、紫禁集六一三)

一〇月二七日 順徳天皇から返歌を賜る。(明日香井集一五三七、紫禁集六一四)

建保四年(一二二六 四七歳)

正月四日 臨時御会で筆築を所作。(御遊抄)

二月頃 建保四年院百首(明日香井集七二八・八二七)を詠進したか。

三月二八日 任右兵衛督。(尊卑分脈・公卿補任)

三月二九日 前項について定家と贈答。(明日香井集一六三四・一六三五、拾遺愚草二五二二・二五二三)

閏六月九日 内裏百番歌合(明日香井集一二四七・一二五六、

記)

閏九月一九日 内裏歌合(明日香井集二二〇一〜一二〇三、大観五卷二〇九) 順徳天皇と番えられ、三番とも負けている。

一〇月一四日 和歌所当座歌会(明日香井集一二〇四〜一二〇八) 後鳥羽院御集・如願法師集によると、水無瀬殿で行われた。後鳥羽院御集には一二月一四日と記されている。「冬月」五首。

一〇月一七日 先日作った懸を試すため、鞠足を伴って定家邸を訪れ、蹴鞠をする。(明月記)

一〇月三〇日 定家を訪れ、今日水無瀬に参ると告げる。(明月記)

十一月七日 定家が、実朝から和歌文書を求められ、相伝する万葉集を雅経を通じて送る。(明月記翌日条)

十一月八日 定家を尋ね、談ずる。(明月記)

十一月一〇日 行幸に供奉。(明月記)

十一月二日 参内。(明月記)

十一月四日 行幸に供奉。(明月記翌日条)

十一月三日 定家が実朝に献上した、相伝私本万葉集が鎌倉に到着。(吾妻鏡)

十一月四日 行幸に供奉。(明月記)

十一月二八日 「諸社使」の一人として雅経の名が見える。(明月記)

十二月二日 蹴鞠の際に紫革襪を許される。(明月記)

十二月二日 内侍所御神楽で筆簞を所作。(明月記・順徳院宸記)

十二月二五日 夕方、定家を尋ね、語り合う。(明月記)

十二月二六日 宮中での御仏名に参る。(明月記)

この年「建保元年のころ霞中余寒と云ふことを」(明日香井集一三〇二)

建保二年(一二一四 四五歳)

正月三日 高陽院での朝覲行幸御遊に雅経も参加したか(注二〇)。

正月五日 叙正四位下。(尊卑分脈。公卿補任は「臨時」とする)

正月七日 叙位の儀に出席する。(明月記)

正月一三日 任伊予介。(公卿補任)

二月三日 内裏詩歌合(明日香井集一二四〇、夫木抄五六〇・一四七〇)「野外霞」「河上花」の二題各二首(注二二)。明月記によると、この後「庭上柳」題で当座の歌会があったようであるが、雅経歌は知られない。

三月二十日頃 順徳天皇と贈答。(明日香井集一三三二・一三三三)

三月 紫禁集(三三六・三三七)では、歌には異同がないが、三月一〇日とする。

三月二九日 院の御所での蹴鞠に遅参、勘責をうけ、籠居。(明月記)

七月二五日 百日歌合(明日香井集六二九〜七二七) 歌合とあるが他の歌人の歌を見いだせず、私的な百首歌と考えられる。

八月一五日 秋十首撰歌合(明日香井集一二二四〜一二二九) 水無瀬殿で催された。

八月一六日 内裏秋十五首歌合(明日香井集一二〇九〜一二二二)

三、大観五卷二一〇) 家隆・定家・順徳天皇らと番えられ、

七月二三日 道家邸詩歌会。雅経は出詠のみ。(明月記)

九月二五日 内裏秋十首歌会歌を定家詠進。明月記二月四日条により雅経も出詠したと推定されるが、雅経歌は知られない。

一〇月一〇日 後鳥羽院が有心無心連歌を行い、雅経ら出座。

(大日本史料所引明月記略)

一〇月二九日 前日の大嘗会御禊について定家と贈答。(明日香井集一六二六・一六二七、拾遺愚草二五〇二・二五〇三)

十一月一日 大嘗会で、在陣の将の中に名が見える。(明月記)

十二月一日 行幸に供奉。(明月記)

十二月四日 後鳥羽院が内裏秋十首歌会歌を召して書写、雅経が最も優れている由の沙汰あり。(明月記)

十二月一〇日 後鳥羽院の有心無心連歌に出座。(明月記)

十二月一八日 後鳥羽院の有心無心連歌に出座、定家と同乗して帰宅。明後日春日社に参ると話す。(明月記)

十二月二五日 内侍所御神楽で簞篋を所作。(順徳院宸記)

この年「建暦二年のころよみ侍りける歌の中に」(明日香井集

一二九九・一三〇一)、「建暦二年の家会に、沢螢火を」(同、

一三三二)

建保元年(一二二三 四四歳)

正月一三日 御幸に供奉。(明月記)

二月一四日 夜、定家を尋ね、談ずる。「曉鐘以後」帰宅。(明月記)

三月一一日 鳥羽殿の朝覲行幸御遊に出席したか(注一八)。

三月一六日 内侍所御神楽で簞篋を所作。(順徳院宸記)

四月八日 行幸に供奉。(明月記)

四月一〇日 院御所での蹴鞠に宗長とともに参加。(明月記)

四月一一日 院御所での蹴鞠に宗長とともに参加。(明月記)

四月一二日 院御所での蹴鞠に参加したか(注一九)。

四月一三日 行幸に供奉。その後、定家と語る。(明月記)

四月二六日 法勝寺九重塔供養において修明門院御方の布施役を務める。(明月記)

五月二四日 祇園御霊会の馬長に指名される。(明月記)

七月一七日 松尾社歌合(明日香井集一一八七・一一八九)「初秋風」「山家暮」「社頭雑」の三題。後鳥羽院御集によると、無判。

七月二四日 定家を訪れ、関東から示された草子の事などについて語る。(明月記)

七月二五日 公卿勅使に供奉。(明月記)

七月二七日 堂供養に参る。(明月記)

八月七日 内裏歌合(明日香井集一一九五・一一九七、大観一

〇卷五八) 無判。

八月一七日 定家が雅経を通じて源実朝に贈った、和歌に関する文書などが実朝のもとに届く。(吾妻鏡)

八月二一日 横領をたくらみ、雅経の因幡庄にいた法師を捕える。(明月記)

八月二七日 修善所の講筵に臨席する。(明月記)

九月一三日 内裏歌合(明日香井集一一九八・一二〇〇、大観一〇卷六〇) 判・判詞とも伝わらない。

閏九月五日 後鳥羽院の有心無心連歌に出座。(明月記)

閏九月八日 定家の依頼で、定家の邸の庭に懸を作る。(明月

八月一日 河崎会（明日香井集一一七三） 題は「雨中草花」（注一三）。

九月二二日 栗田社歌合（明日香井集一一七四、一一七六）

「寄海朝」「寄山暮」「寄月恋」の三題。

一〇月 新羅社二首歌会（明日香井集一六四一、新三井集三〇

八） 散逸しており詳細は不明（注一四）。「社頭菊」「薄暮時雨」の二題。

この年 次男教定出生（注一五）。

建暦元年（一二二一 四二歳）

閏正月四日 「庭雪駄跡といふ題を賜てよみ侍りける」（明日香

井集一一七七） 他に同じ題の歌は見いだせず、詳細不明。

閏正月二二日 旬御鞠に宗長とともに参加。（大日本史料所引道

家公鞠日記）

五月九日 新日吉競馬に不参。（大日本史料所引道家公鞠日記五

月一五日条）

五月一五日 前項により召し籠められる。（大日本史料所引道家

公鞠日記）

五月一八日 院御鞠に召し立てられる。（大日本史料所引道家公

鞠日記）

六月二六日 内裏御蹴鞠に宗長とともに参加。（大日本史料所引

道家公鞠日記）

九月八日 定家が従三位に叙せられると同時に侍従に任じられ、歌を贈答。（明日香井集一六三一・一六三三、拾遺愚草二

五一・二五二三）

九月二四日 任大臣饗御習礼で筆策を所作。（御遊抄）

九月二四日以降 鴨長明とともに鎌倉へ下向か（注一六）。

一〇月二二日 大嘗会御禊の行幸に供奉。（明月記）

この年か 「日吉禰宜親成七十賀し侍りけるによみてつかはしける」（明日香井集二二九八）（注一七）

建暦二年（一二二二 四三歳）

正月七日 白馬節会に参る。（明月記）

正月九日 修正会御幸に供奉。（明月記）

五月二二日 院御鞠会に宗長とともに参加。（大日本史料所引道

家公鞠日記）

正月二五日 院宣により、宗長と共に定家邸の柳二本ばかりを

切り、高陽院の鞠壺に立てる。（明月記二月二日条）

二月一五日 翌々日の奉幣で八幡使を務めるよう仰せあり。

（明月記）

二月二五日 大内花下応製（明日香井集一一七八、一一八〇）

三月二日 後鳥羽院が最勝寺で蹴鞠を行い、宗長とともに参加。

（大日本史料所引道家公鞠日記）

四月一七日 定家を尋ね、談ずる。（明月記）

五月九日 小五月会競馬を見物する。（明月記）

五月一日 内裏詩歌合（明日香井集一一八一、一一八六） 順

徳天皇主催の最初の詩歌合。

六月二九日 藤原道家の任内大臣御遊で筆策を吹く。（御遊抄）

七月六日 筆策の師、安倍季遠の追善供養の後に詠歌。（明日香井集一五九七）

七月一三日 七条殿への行幸に供奉。定家が歌題を召され、雅

経と相談。（明月記）

三月七日 鴨御祖社歌合（明日香井集一一六四～一一六六、大観五卷二〇五） 無判。下鴨神社に奉納された。次の賀茂別雷社歌合と一対。

三月七日 賀茂別雷社歌合（明日香井集なし、大観五卷二〇六） 無判。

四月一日 定家が匂御鞠の帰途、川原で雅経に会う。（明月記）
絵に歌を添え後鳥羽院に献上する。（明月記四月三日条）

五月五日 最勝四天王院障子和歌の歌人として雅経の名が見える。（明月記）

五月一日 秀能らとともに和歌所に招かれ、最勝四天王院障子和歌の絵について話し合う。東国を見ているため、後鳥羽院の仰せにより加えられた。（明月記）

六月四日 早朝、定家を探ね、話をする。（明月記）

六月一日 定家を探ねるが、定家は所労のため会わず。（明月記）

六月頃 最勝四天王院障子和歌（明日香井集九六九～一〇一四）
詠進か（注一〇）。

七月二九日 御遊で筆算を所作。（明月記）

この年 雅経女、中将忠嗣室出生。（明日香井集一五九三詞書より逆算）（注一一）

承元二年（一二〇八 三九歳）

二月二三日 革菊要略集裏書にこの日の詠歌一首あり。

四月七日 後鳥羽院を蹴鞠の道の長者と号する表を、藤原泰通・宗長とともに奉る。（古今著聞集 卷二 蹴鞠、四一四）

閏四月四日 和歌所歌合（明日香井集一一六七～一一六九） 拾

遣愚草の詞書により和歌所で行われたと推定。「雨中郭公」遇不遇恋」「寄述懷雑」の三題。

閏四月一日 定家、雅経の家を借りる。（明月記）

同年以降建暦二年までの五月五日か 坊門忠信と贈答。（明日香井集一六四四・一六四五）（注一二）

五月二九日 住吉社歌合（明日香井集一一七〇～一一七二）
「寄月祝」「寄旅恋」「寄山雑」の三題。

六月二日 藤原良輔が雅経に「示歌事」。（明月記）
一二月九日 任左中将。（公卿補任。尊卑分脈は「中将」とする）

承元三年（一二〇九 四〇歳）

正月一三日 任周防権介。（公卿補任）

七月七日 壱岐前司親重を思い出して詠歌。（明日香井集一五九五・一五九六）

八月一日 家会。（明日香井集一三四九～一三五五）
この年か 長尾社歌合（明日香井集なし、夫木抄一六四九） 散逸しており、詳細は不明。夫木抄所載歌により「社頭花」「海

辺帰雁」の二題であったと考えられる。

承元四年（一二一〇 四一歳）

正月六日 叙従四位上。（尊卑分脈・公卿補任）

三月二〇日 南殿の花見に行き、源定通・具親と歌を贈答。（明日香井集一三一五～一三一七） その後詠歌。（明日香井集一三八）

三月 花山院の花見に行き、詠歌。（明日香井集一三三四）

七月五日 法勝寺御幸に供奉。(明月記)

七月十三日 和歌所で、定家・藤原有家・藤原家隆・源具親と会合し、住吉社に「今度の歌合」(＝同月二十五日の卿相待臣歌合。この五人は右方の作者)についての願書を書き、雅経が社頭に奉る使者となる。(明月記)

七月十三日 和歌所当座歌合(明日香井集一一五〇～一一五二) 明日香井集では「院当座歌合」とするが、拾遺愚草・新古今集の「和歌所」が正しいと思われる。「湖辺月」「暮山雲」「行路風」の三題。

七月十七日 定家・具親・有家・家隆と雅経邸で会合。歌を見せ合う。(明月記)

七月二十日 歌のことで定家を訪問。(明月記)

七月二十五日 卿相待臣歌合(明日香井集一一五三～一一五五、大観五卷二〇四) 俊成卿女と番えられ、二勝一負。なお、評定後に三題の当座歌合があつたが、雅経歌は知られない。

七月二十八日 院当座歌合(明日香井集一一五六～一一五八) 「寄風懷旧」「雨中無常」「被忘恋」の三題。拾遺愚草では「和歌所」となっている。

七月二十九日 和歌所へ参り、定家・家隆・具親と終日新古今集を見る。(明月記)

八月一日 卿相待臣嫉妬歌合(明日香井集一一五九～一一六一) 明日香井集・後鳥羽院御集・拾遺愚草には八月とのみ記されているが、明月記により八月一日に催されたと考えられる。述懐三首。

八月五日 御遊で筆簞を所作。(明月記) 鳥羽殿御会(明日香井集一一六二) 題「庭上月」。講師を務めた。(明月記)

八月一日 後鳥羽院の有心無心連歌に参加。(明月記)

八月一日 後鳥羽院の有心無心連歌に参加。(明月記)

八月十四日 御所で定家に放生会の事を問う。放生会に参加。

(明月記)

八月十七日 後鳥羽院の城南寺御幸に供奉。雅経の言を定家が批判する。(明月記)

八月十八日 後鳥羽院の有心無心連歌に参加。(明月記)

八月十九日 定家・秀能らと源通光の久我亭に赴き、筆簞を吹く。和歌三首を詠む。(明月記。明日香井集なし)

この年八月以降承元四年八月か「八月十日あまりのころ、兼季中将信能少将などともなひて、鴨欄宜祐綱が河崎の泉へまかりて侍りければ、もとより人人のあそぶ景気のしければ、にげ帰りに祐綱がもとへつかはしける」(明日香井集一三六二、一三六三)(注九)

九月二日 具親・定家らと連歌。(明月記)

九月六日 御遊で筆簞を所作。(明月記)

九月二十五日 新古今集に歌を切り入れる件で、定家とともに召される。(明月記)

一〇月一七日 後鳥羽院の仁和寺御幸に供奉。(明月記)

承元元年(一二〇七 三八歳)

正月二日 朝覲行幸に供奉。(明月記)

正月三日 御幸始に供奉。(明月記)

正月二二日 和歌所御会(明日香井集一一六三) 明日香井集には「院御会」とあるが、後鳥羽院御集・明月記により和歌所で行われたと知られる。題「春松契齡」。

七月二八日 和歌所で会合、殊に遅参する。夏部の部類を終える。(明月記)

八月一五日 八月十五夜当座御会(明日香井集一一三七)「翫月」一題。後鳥羽院御集・秋篠月清集・拾遺愚草によると、五首の歌会に続くものであるが、雅経歌は知られない。

十一月一〇日 春日社歌合(明日香井集一一三八～一一四〇・大観五卷二〇二) 明日香井集では「十一月十三日」とするが、十一月一〇日に和歌所で催され、一三日に春日社に奉納された。二勝一負。雅経ら御感の御教書を賜る。(明月記)

十一月二三日 賀茂行幸に供奉。(明月記)

十一月一九日 五節の舞姫参入、雅経出仕する。(明月記翌日条)

十一月 北野宮歌合(明日香井集一〇一五～一〇一七、大観五卷二〇一) 明日香井集では年次を「建久元年十月」と誤る。一負二持。

元久二年(一二〇五 三六歳)

正月五日 参内。(明月記)

正月九日 千日影供百首(明日香井集三八一～四七九) 詠作開始。私的な作。

正月二九日 任加賀権介。(公卿補任・明月記。尊卑分脈は加賀介とする)

三月一三日 後鳥羽院が御製三〇首を日吉社に奉納し、雅経が使いを務める。(明月記翌日条)

三月一八日 和歌所へ参る。(明月記)

三月二六日 新古今集竟宴。(明日香井集一一四一、大観五卷二六〇)

五月一日 定家を訪問。(明月記)

六月一五日 元久詩歌合(明日香井集一一四二～一一四五、大観五卷二〇三) 二勝一持、勝負付欠一。

七月一九日 北野宮歌合(明日香井集一一四六～一一四八) 後鳥羽院御集・和歌合略目録では七月一八日。「初秋暁」「暮山雨」「田家風」の三題。

九月九日 百首和歌(明日香井集四八〇～五二七) 詠作開始。私的な作。

一〇月八日 定家の嵯峨草庵に秀能らとともに赴き、詠歌。(明月記。明日香井集なし)

十一月以降承元三年中 嫡男教雅出生か(注七)。

十二月三日 春日社百首(明日香井集五二八～六二八) 披講。私的な作。

建永元年(一二〇六 三七歳)

正月六日 叙従四位下。(尊卑分脈・公卿補任) 同じころ、家長と贈答。(明日香井集なし、源家長日記一四四・一四五)

正月一日 高陽院歌合(明日香井集一一四九) 題は「庭花春久」。後鳥羽院の御所高陽院で行われた。

正月一三日 還任左少将。(公卿補任)

正月一七日 藤原為家が従五位上に叙され、定家と贈答。(明日香井集一六二八・一六二九、拾遺愚草二五〇八・二五〇九)

正月一七日以降、建暦元年九月八日以前か 教雅を行始に定家のもとへつかわす。(明日香井集一六三〇・一六三一、拾遺愚草二五二〇・二五二一)(注八)

三月二八日 任大臣節会で筆策を所作。(御遊抄)

九月一三日 当座歌会(明日香井集一一一五) 前項に続いて行われた。明日香井集では、前項と順序が前後している。「みなせがは」の隠題。

九月二六日 若宮撰歌合(明日香井集一一〇三・一一二一) 次項とともに水瀬恋十五首歌合からの撰歌合。歌・結番は次項と同一。

九月二九日 水無瀬桜宮十五番歌合(明日香井集一一〇三・一一二一)

建仁三年(一一一三 三四歳)

正月一五日 京極殿初度御会(明日香井集一一一七) 明日香井集では二五日とするが、正しくは正月一五日。「松有春色」一題。

二月二〇日 近衛家実、翌日の春日祭のため、陪従の装束六具を雅経のもとに送る。(猪隈関白記)

二月二三日 院御所の歌合に参加。(明月記。明日香井集なし)
二月二四日 定家らと大内花見。和歌を詠み、連歌を行う。また、雅経は筆算を吹く。(明月記・源家長日記)

三月三日 春宮で定家と深夜まで清談する。(明月記)

三月一〇日 後鳥羽院の熊野詣を見送る。(明月記)

五月二七日 法勝寺における八万四千基塔供養に供奉。(明月記)

六月一六日 影供歌合(明日香井集なし、大観五卷一九八) 和歌所で行われた。二負一持。

六月一六日 「影供のついでに」(明日香井集一一一八・一一一九) 前項に続いて詠まれた。「夏月」二首。

七月一五日 八幡若宮撰歌合(明日香井集なし、大観五卷一九九) 雅経は、「海辺雁」題一首のみ選ばれ、勝っている。

八月一日 良経郎において詩歌合が行われ、御教書を送られたが参加せず。(明月記)

八月一五日 釈阿九十賀屏風和歌(明日香井集一一二〇・一一二一) の撰定が行われた。

八月一五日 和歌所当座歌会(明日香井集一一三二・一一三六) 前項に続いて催された。

九月一五日 行幸に供奉。(明月記)

十一月二三日 藤原俊成九十賀が行われる。屏風に一首撰ばれる(明日香井集一一二四・源家長日記七五)。御遊において筆算を所作。歌会が行われる。(源家長日記。明日香井集なし)

十一月二四日 俊成が詠んだ感謝の意を表す歌二首に対して、後鳥羽院の命で返歌二首詠む。(源家長日記八二・八三、明日香井集なし)(注五)

十一月二五日 試楽に参る。(明月記)

十一月二六日 宇治新造御所御幸に供奉。(明月記)

この年か 長柄橋のきれを、歌を添えて後鳥羽院に献上する。(源家長日記三八。明日香井集なし)(注六)

元久元年(一一二〇 三五歳)

五月二〇日 後鳥羽院の使いで、院の歌を春日神社に奉納、自作を書き添える。(明日香井集一六四二)

七月一七日 若宮百日の祝が行われ、筆算を所作。(明月記)

七月二七日 和歌所で、定家・家長らと会合、新古今集春上下の部類を終える。(明月記)

鳥羽院御集・明月記により、「松月夜涼」題で行われた歌会に続く当座歌会であったことが知られるが、雅経歌は見いだせない。

八月三日 和歌所影供歌合(明日香井集一〇六七～一〇七二、

大観五卷一八八) 藤原良経と番えられ五負一持。

八月四日 翌日の撰歌合の和歌の撰定に加わる。(明月記)

八月十五日 八月十五夜撰歌合(明日香井集一〇七三～一〇七八、大観五卷一八九) 後鳥羽院が和歌所で催した。三負三持。

左方講師を務める。(明月記)

八月十五日 仙洞当座歌会(明日香井集一〇七九～一〇八二)

明月記によると、前項に続いて行われた当座歌会。明月記では和歌所とする。また、雅経歌は、「深夜聞虫」「海辺暮鹿」「羈中曉恋」の三題だが、後鳥羽院御集(一五五八～一五六〇)に「同夜当座御会」として収めるものと題が異なる。如願法師集には、「和歌所御歌合に、羈中曉恋」とする一首がある(六二六)。

九月一三日 和歌所影供歌合(明日香井集一〇八二～一〇八四、

大観五卷一九〇) 二勝、勝負付欠一。

十一月三日 新古今集撰進の院宣が下る。(明月記)

十一月二十七日 第二親王(Ⅱ道助法親王)の仁和寺渡御に供奉。

(明月記)

十二月二日 和歌所歌合(明日香井集一〇八五～一〇八七) 明

日香井集では題は「寒野冬月」「山家夕嵐」「無題」であるが、後鳥羽院御集では「寒夜冬月」「山家暮嵐」「初恋」。

十二月二十八日 石清水社歌合(明日香井集なし、大観五卷一九

二) 三題であるが、雅経歌は「旅宿嵐」一首しか残っており

ず、負けている。

同年中 秀能と住吉神社に参詣したか。(如願法師集九一六詞書による)(注四)

建仁二年(一二〇二) 三三歳

正月五日 叙正五位下。(尊卑分脈・公卿補任)

正月六日 参院。(明月記)

正月十三日 和歌所歌会(明日香井集一〇八八～一〇九〇)

「初春松」「春山月」「野辺霞」の三題。

二月一日 影供歌合(明日香井集一〇九一～一〇九三)「海

辺霞」「関路鷺」「忍恋」の三題。和歌所で催された。

講師を務める。(明月記)

三月二日 三体和歌会。「所労」と称し、不参。(明月記)

七月 寂蓮没。藤原定家と贈答する。(明日香井集一五九三・一

五九四、拾遺愚草二八六九・二八七〇、源家長日記一七・一八)

八月十五日 和歌所御会(明日香井集一〇九四～一〇九六)

「月前虫」「月前鹿」「月前風」の三題。明月記・万代集によ

ると、和歌所で八月十五夜に催された。

八月二十五日 百首和歌(明日香井集二九四～三八〇)を詠む。

私的な作。

九月二三日 水瀬恋十五首歌合(明日香井集一〇九七～一一一

一、大観五卷一九四) 四勝六負五持。

九月二三日 当座歌会(明日香井集一一二一～一一二四) 前項の後に行われた。「月前秋風」「水路秋月」「曉月鹿声」の三題。

九月二三日 折句(明日香井集一一一六) 前項に続いて詠まれ

た。「しうさむや」を句頭に置く。

われたことが知られる。

一〇月八日 皇子行幸始に供奉。(明月記)

一〇月以降一二月までの間 正治後度百首(明日香井集九四、一九三)詠作。

一月八日 影供歌合(明日香井集一〇四七、一〇四九) 源通親主催。「暮山雪」「古寺月」「朝遠望」の三題。

一月二八日、二月一日、五日 熊野懷紙(明日香井集なし、大観十卷一三四)の存在により、熊野御幸に供奉したことが知られる。雅経歌は、一二月三日「遠山紅葉」「海辺眺望」、一月二六日「山河水鳥」「旅宿埋火」、同月「行路水」「暮炭竈」

「山路眺望」「暮里神楽」の八首が現存する。

二月二三日 後鳥羽院の水無瀬御幸に供奉。(明月記)

二月二五日 仁王会に参る。(明月記)

二月二六日 影供歌合(明日香井集一〇五〇、一〇五二) 源通親主催。「暁尋千鳥」「山家如春」「海辺歳暮」の三題。

この年、熊野類懷紙歌(明日香井集なし)を詠むか(注三)。

この年後半か(大観解題による) 石清水若宮歌合(明日香井集一〇一八、一〇二二、大観五卷一八二) 道清主催。全真と番えられ、三勝二負。

建仁元年(一一〇一 三三歳)

正月二八日 影供歌合(明日香井集一〇五三、一〇五五) 明日

香井集では「廿八日」とするが、後鳥羽院御集・和歌合略目錄は一八日とする。通親主催の影供歌合。「遠島朝霞」「隣家

夜梅」「山家残雪」の三題。

正月二九日 兼越前守。(公卿補任) 任右少将。(尊卑分脈・公

卿補任)

二月八日 建仁元年十首和歌(明日香井集なし、大観十卷一三三) 五) 後鳥羽院が催した。

二月一六・一八日 老若五十首歌合(明日香井集八六九、九一八、大観五卷一八四)

三月二〇日 関東より帰洛。(明月記) 下向日不明だが、前項以後であろう。

三月二一日 京を出る。(明月記)

三月二八日 参院、翌日の撰歌合のために歌を撰ぶ。(明月記)

三月二九日 新宮撰歌合(明日香井集一〇五六、一〇五八、大観五卷一八六) 後鳥羽院主催。一勝一負一持。

春 藤原秀能と百首を詠む。(明日香井集なし。如願法師集三四

六詞書による)

四月二六日 鳥羽殿御会(明日香井集一〇五九)「池上松風」一題。後鳥羽院御集によると、鳥羽殿で行われた初度の歌会。

筆簪を所作。(御遊抄・明月記)

四月三〇日 鳥羽殿影供歌合(明日香井集一〇六〇、一〇六一、大観五卷一八七) 一勝一負一持。

四月三〇日 院当座御会(明日香井集一〇六三、一〇六四) 前項に続いて行われた。「竹風夜涼」「山家五月雨」の二題。

六月三〇日 院当座御会(明日香井集一〇六五)「六月祓」一題。

六月頃 千五百番歌合(明日香井集一九四、二九三、大観五卷一九七) 詠進か。

七月二七日 和歌所が置かれ寄人となる。(明月記七月二六日条) 和歌所御会(明日香井集一〇六六)「暮山遠雁」二題。後

建久六年（一一九五 二六歳）→建久七年（一一九六 二七歳）
この頃結婚か（注一）。室、大江広元女。（尊卑分脈）

建久八年（一一九七 二八歳）

正月七日 後鳥羽天皇より上洛を命じる御教書が到着する。（大日本史料所引革弔別記）

日本史料所引革弔別記

二月四日 鎌倉を出発する。（大日本史料所引革弔別記）

二月一日 京都着。（大日本史料所引革弔別記）

二月二五日 後鳥羽天皇に謁し、一旦退出後、蹴鞠に召される。

（大日本史料所引革弔別記）

二月二六日 参内し、蹴鞠を行う。（大日本史料所引革弔別記・源家長日記）

源家長日記

四月一九日 臨時御会で筆簪を所作。（御遊抄）

四月二〇日 朝覲行幸御遊で筆簪を所作。（猪隈関白記）

一二月一五日 任侍従。（尊卑分脈・公卿補任。ただし、猪隈関白記四月二〇日条に「侍従雅経」と見える）

白記四月二〇日条に「侍従雅経」と見える）

建久九年（一一九八 二九歳）

正月五日 叙従五位上。（尊卑分脈・公卿補任・明月記翌日条）

正月一日 後鳥羽天皇讓位。

二月三日 後鳥羽院の西郊女院への御幸に供奉。（明月記）

二月四日 後鳥羽院の八幡御幸に供奉。（明月記）

五月二〇日 鳥羽百首（明日香井集一→九三）を詠み始める。

正治元年（一一九九 三〇歳）

三月一七日 院の大内南殿花御覧のための御幸に供奉。藤原範

光と贈答する。（明日香井集一三一・一三二）

三月一八日 「きのふの御幸の事をおもひて」詠歌。（明日香井集一三三）

九月四日 五十首和歌を詠む。（明日香井集八二八→八六八）

正治二年（一二〇〇 三一歳）

七月一八日 当座三首歌合（明日香井集なし、夫木抄一四九八

三）

八月一日 新宮歌合（明日香井集一〇二三→一〇二五）「社頭

祝」「池上月」「野辺虫」の三題。

九月九日 二位殿の出産を控え、後鳥羽院と贈答。（明日香井集

なし、源家長日記 五）（注二）

九月三〇日 院当座歌合（明日香井集一〇三九→一〇四一、大

観五卷一七九）二勝一持。

九月 玉津島会（明日香井集一〇二六→一〇二八）「海浜暁月」

「山館秋雨」「松風破夢」の三題。他の歌人の詠は見いだせ

ず、詳細不明。

九月か一〇月 仙洞十人歌合（明日香井集一〇二九→一〇三八、

大観五卷一八二）四勝三負三持。

一〇月一日 院当座歌合（明日香井集一〇四四→一〇四六、大

観五卷一八〇）一勝一負一持。ただし、歌合本文では、いず

れも作者名が雅経ではない。一〇四四と一〇四六は藤原隆

祐、一〇四五は宗長となっている。

一〇月一日 院当座歌合（明日香井集一〇四二・一〇四三）

「社頭霜」「東路月」の二題。明日香井集では前項の前に置か

れているが、明月記一〇月一日の条により、前項に続いて行